

第 1 回大府市長寿社会懇話会

会 議 録

平成 20 年 7 月 16 日

第1回大府市長寿社会懇話会

- (1) 開催日時： 平成20年7月16日（水）午後3時30分から午後5時6分まで
- (2) 場 所： 大府市役所 3階 庁議室
- (3) 出席委員： 大島伸一氏、大山尚雄氏、梶岡多恵子氏、堀田あけみ氏
- (4) 欠席委員： 大沢 勝氏
- (5) 市出席者： 久野市長、岡村副市長、伊佐治健康福祉部長、
広瀬高齢者支援室長、原田、舟橋
- (6) 傍聴者： なし
- (7) 取 材： 知多メディアネットワーク【三輪、森、河野】
中日新聞社【長坂】
- (8) 会議内容
 1. 市長あいさつ
 2. 委嘱状交付
 3. 自己紹介
 4. 懇話会の概要説明
 5. 会長及び副会長の選任について
 6. 会議の運営について
 7. 資料説明
 8. 意見交換「理想の長寿社会について」
 9. その他

開 会

【広 瀬】

お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。本日の司会を務めます福祉課高齢者支援室長の広瀬と申します。ただいまから、第1回大府市長寿社会懇話会を始めます。まず、大府市長久野孝保から、ご挨拶させていただきます。

1. 市長あいさつ

【市 長】

大府市の都市目標としては、「健康都市」
観光資源がないため、何かを作りたいと思っていたところ、国の土地を県が払い下げて、あいち健康の森公園が完成。その場所に、国に6つあるナショナルセンターである国立長寿医療センターを誘致しました。

大府市を「健康に」と、一丸となって進めてきました。長寿社会となって、健康都市を創るには、高齢者の姿をきちんと描くべき。

大島総長からもこれまでアドバイスをいただけてきました。行政として、0歳から終末までの施策の充実を図りたい。

大府市は、こども医療が中学3年生まで無料、妊産婦健診が17回無料、放課後クラブが6年生まで実施等、次世代育成は充実しています。しかし、定年から終末までの社会生活に問題があります。定年後の生きがいづくりが必要だと思っています。年金などの社会保障だけでなく、健康保持施策や社会システムづくりを構築していきたい。

ぜひ、意見をちょうだいして、「こうあるべきだ」というものを施策化したい。委員の方々は、それぞれ活躍していらっしゃる方ですので忌憚のないご意見をいただきたいと思っています。

2. 委嘱状交付

大府市長から各委員へ、委嘱状が手渡されました。

3. 自己紹介

【大島委員】

大府と東浦にまたがる国立長寿医療センターで働いています。よく市長と話していますが、世界中が今、高齢社会で特にアジアが著しい。日本をキャッチアップする形で急速に進行。センターには、韓国、台湾、シンガポール、タイなどから「日本がいったい何を考えているのか」「日本がどういう高齢社会を創ろうとしているのか」を見るために視察に来ています。

中部国際空港を通して、年中、外国人が学びに来る地区を創りたい。「ここを見てくれ」という場所を創りたい。「高齢者があんなに明るくしているでしょ」という地域づくり。それが世界貢献である。高齢社会をどうあるべきかを考え、世界中の人たちが学びに来る場所を。その第一歩としてこの懇話会に期待しています。

【大山委員】

自分は、プランをいただくという立場で発言させてもらうことになるかもしれない。リタイヤして6年目。自分でも何をしていけばいいかというのが課題です。元気で明るくとは言っても、なかなか難しい。自分で発掘しなければいけないとは思いますが。そんな人をどう行政が支えるか、地域が支えるか。

「健康と経済は、自らの力で」という気持ちで発言したいと思います。40年間サラリーマン、16年間市議と、狭い経験だが、プランを受けるという立場を含め、意見をさせていただければと思います。

【梶岡委員】

大府市には平成14年からボディデザインスクールでお世話になっています。研究生の頃、長寿医療センターでも指導を受けていたことがあります。大府市は、研究と実践ができる恵まれた環境にあり、たくさんの被研者がデータに協力してくれています。

現在は、東京大学でパブリックヘルス（公衆衛生）を学び、研究データを市民にどう生かすかという研究をしています。市民に健康づくりをどう実践してもらうか、経験を踏まえ、お役に立てればと思います。

【堀田委員】

小説を書くとともに教育心理学を専門にしています。高齢者というよりどちらかという子ども。その中でも障がいのある子どもをメイン。私自身障がいを持つ子の親です。東海3県のうちでも、どこに住んでいるかで、どれだけの行政サービスが受けられるかが大きく変わります。

次世代育成については、大府市は充実していると思っています。同期である辻井さんに、「大府に引っ越せば」と言われたくらいです。

私自身、今まで上の世代に目をむけることがあまりありませんでした。親族は長患いしなかったのに、長寿社会が実感できていません。

現在、主人の母が一人暮らしですが、最終的にどこに行くのか。最後の拠り所は、子どもか、嫁か、孫か…。自分の家族のことですら解決できていません。

どれだけお役に立てるか、わかりませんが、会議の中で勉強して、今後、世の中に生かしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく申し上げます。

【広瀬】

ここで、大府市の職員も自己紹介をさせていただきます。

【副市長】

副市長の岡村秀人でございます。

【部長】

健康福祉部長の伊佐治辰夫でございます。

【原田】

福祉課高齢者支援室の原田好美でございます。

【舟橋】

同じく舟橋佳奈子でございます。

4. 懇話会の概要説明

【広瀬】

続きまして、会議次第4番目にまいります。長寿社会懇話会の概要について、事務局から説明いたします。

【原田】

それでは、「長寿社会懇話会の概要」につきまして、説明をさせていただきますので、お手元の資料No.1をご覧ください。

まず、この会議の目的でございます。

現在、日本の高齢化率は、21.5%、大府市におきましても 16.1%と、年々増加しており、その速度も大変速いものです。したがって、行政は、速やかに、この超高齢社会に対応できる施策を打ち出さなければなりません。

懇話会では、「健康都市おおぶ」に相応しい高齢者のあり方を検討し、「理想の長寿社会」のモデルとなるような大府市を実現させ、日本へ、また世界へ発信していきたいと思っております。

理想の長寿社会のイメージとして考えておりますのは、「生涯にわたり安心して暮らせること」「明るく元気で長生きを喜ぶこと」また、「健康、介護、経済、生きがい、住まいに満足できること」というように、高齢者の顔が生き生きとしてくるまちづくりを目指していきたいと思っております。

会議につきましては、本日を含め、5回を予定しております。会議の流れについて、以下のように記載してございますが、懇話会の中で協議する場を持ちながら、進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

そして、裏面は、懇話会の設置要綱を載せてございます。また、ご一読くださいますようお願いいたします。

以上で、終わります。ありがとうございました。

5. 会長及び副会長の選任について

【広瀬】

続きまして、会議次第、5の「会長及び副会長の選任について」に移ります。大府市長寿社会懇話会設置要綱第5条第1項の規定によりますと、会長は「委員の互選により定める」とされています。どなたか、立候補又は推薦される方はございませんか。

【大山委員】

大府市にご指導いただいております国立長寿医療センターの大島さんを会長にご推薦申し上げます。

【広瀬】

大島委員を会長にというご推薦がありましたが、いかがでしょうか。

【委員ら】

異議なし

【広瀬】

ありがとうございました。それでは、大島委員に会長をお願いしたいと思います。

次に、副会長ですが、要綱第5条第3項の規定により、会長に副会長を指名していただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

【大島会長】

大沢委員をお願いしたいと思いますですが、欠席ですが、本人の意向は？

【広瀬】

欠席のご連絡をいただきましたときに、「もし副会長の指名がございましたらお引き受け願えますか」とお聞きしたところ、ご了解いただきました。

【大島会長】

それでは、大沢委員に副会長をお願いします。

【広瀬】

ありがとうございました。それでは、会長のご挨拶をお願いします。

【大島会長】

先程、「高齢社会を考えるには距離がある」というようなお話が堀田さんからありましたが、私も、従来、医者としては腎臓移植が専門で、最先端のところにいましたので、最初は、同じ医療といっても高齢者医療との間に大変な距離を感じておりました。ミスマッチだと思いながら引き受けましたが、それから「いかに急速に高齢化が進行しているか」を実感することになりました。60歳になって初めて気づいたわけです。高齢化率20%は、すぐに30%時代へ。2050年には、40%を超えると言われていています。歴史上、世界中どこにもこんな高齢社会はないから、モデルとなる場所がない。日本が真っ先に直面しているにもかかわらず、誰も本気になって考えているように見えない。不安な社会状態が充満し、介護殺人、高齢者の孤独死、自殺等が増えています。

20代から70代に行ったアンケートで、「長生きしたいか」と問うと、半分は「長生きしたくない」と答え、70%は「長生きが不安」と答えています。これから日本はどうなるのか。「大変だ」と言っているだけで、答えが出ていない。対応は、後手後手です。

大府市は、モデルとなれる条件が日本で最も整っていると言える。大府から愛知へ、日本から世界へ、まちづくり、社会づくりを発信すべきだと思います。

市長にも積極的に世界を動かしてと言っている。市長も2期目になり、少し全体が見

えたと思う。いいチャンスを与えてもらったので、皆さんからモデルづくりの案をいただきたいと思います。

【広瀬】

ありがとうございました。では、会議次第の6番から、議事の進行を大島会長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

6. 会議の運営について

【大島会長】

それでは、会議次第、6の「会議の運営について」、事務局から説明をお願いします。

【原田】

それでは、お手元の資料No.2をご覧ください。

「大府市長寿社会懇話会運営の指針」について、要綱第8条の規定に基づき、懇話会に諮って定めたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

指針の趣旨につきましては、会議の公開及び会議録について規定するもので、主な内容は、次のとおりです。

- ・会議は、非公開情報を含む内容で行う場合以外は、公開とする。
- ・傍聴者の定員は、5人とする。
- ・会議録は、要点記録方式で、福祉課の職員が作成する。
- ・会議録は、会長が署名し、速やかに公開する。

このような内容となっております。この内容でご承認いただけるか、お諮りいただきますよう、よろしくお願いいたします。

【大島会長】

傍聴の定員を5人と限定する必要がありますか。もっと多くの人に公開しては。

【原田】

2項にただし書として「会場の都合によりこれを増減することができる」と規定されていますので、増やすことは可能です。この規定で対応していただければと思います。

【大島会長】

では、基本的には、そういうことで。皆さんよろしいですね。

【委員ら】

異議なし

【原 田】

ありがとうございました。それでは、傍聴人の方がいらっしゃるかもしれませんので、入っていただいてよろしいですか。

【大島会長】

お願いします。

7. 資 料 説 明

【大島会長】

次に、会議次第、7の「資料説明」について、事務局からお願いします。

【原 田】

お配りいたしました資料は、2種類で、別冊No.1の「高齢者に関する統計資料」と別冊No.2の「都市データパック」2008版でございます。

別冊No.1の「高齢者に関する統計資料」につきましては、目次をご覧ください。「人口の動向」以下8項目の統計につきまして、全国、愛知県、大府市の数値を比較したような表を掲載してございますので、ご参考ください。

時間の都合上、ここでは、6番目の「老年人口の将来推計」のみ、ご紹介させていただきますので、4ページをご覧ください。

この表は、国立社会保障・人口問題研究所が出しております「将来推計人口」でございます。これによると、老年人口自体は、およそ30年後にピークを向かえ、その後は減少傾向であります。その比率につきましては、引き続き増加し、およそ50年後には、40%に達すると見込まれています。

次に別冊No.2をご覧ください。この「都市データパック」は、毎年、東洋経済新報社が発行しているもので、独自の指標に基づき、全国の市と特別区をランク付けしたものでございます。

1枚めくっていただきますと、ランキングの算出方法があります。今年の場合は、784市が対象となり、安心度、利便度、富裕度等の指標のもと、ランク付けがされました。右のページは、総合評価の上位100でございます。大府市は、16位となっており、愛知県では、9位の刈谷市に続いて第2位となります。以下、日進、碧南、安城と、100位以内に県内の16市が入っております。

2ページ、3ページは、大府市の紹介です。総合評価が16位の理由は、財政力が大きいと思われま。3ページの上の四角の中、4行目にあります財政健全度は総合で7位。そこから下の方を見ていただきまして、「財政力」の各々の項目でも、上位にランク付けされているのがおわかりいただけると思います。

また、4ページ以降に、本日までご出席いただきました委員の方がお住まいの市を合わせて載せさせていただきますので、後ほどゆっくりご覧ください。

以上で、資料の説明を終わります。よろしくお願いいたします。

【大島会長】

この資料について、何かありますか。

【梶岡委員】

5ページの表7-2「主な国の平均寿命」で、男性の順位と女性の順位が違うので、もう1列増やし、各々に順位を付けたほうがわかりやすいと思います。

【原 田】

ご指摘ありがとうございます。

【大島会長】

他にはよろしいですか。

【市 長】

大府市は、老年人口も増えているが、おかげさまで年少人口も増えています。堀田委員のお話にもありましたが、大府市は、次世代育成事業が進んでいますので、住む場所を選んでいただけています。

【大山委員】

厚生労働省の発表で、認知症高齢者について、愛知県では、2035年に2005年比の2.6倍になると。(全国平均は、2.2%であるのに対し、)都市部で増加率が大きいようですが。

【大島委員】

不安材料は多く、挙げればきりがなし。衣食住と医、インフラそのものが危なくなっ

ている。より快適にということではなく、生命そのものの不安が高まっている。年金は限界であるし、医療は高い。最近、燃料等、生活に関するものすべてが高い。その中で明るいものは何でしょうか？「いい人生だったか。」と聞かれても自信を持って「大丈夫です」と言えない世の中になっています。

漠然とこんなことを言っている、仕方ないので、明るい材料を増やしていきたい。明るい材料はあるはず。フォーマルだけでなく、インフォーマルなものでも、新しい文化づくりを進めていくべき。

今の資料説明では、日本の中でも愛知県は元気だと。安心して住みやすいまちだということでした。愛知県や大府は、いい人口バランスになっている。そんな中でどうしたらいいかというのが次の課題であると思います。

8. 意見交換「理想の長寿社会について」

【大島会長】

最初ですから、具体的でなくていいから、思ったことをどんどん言いましょう。出てきた中から、方向性が見えてこればいいと思います。それを次回への議論にしたいと思います。

【市長】

テレビや新聞は、将来展望のない話題、暗いニュースが多いです。高齢者の思いとしては、年金は期待はずれだし、後期高齢者も問題である。「大丈夫です。安心してください」と言っていますが、裏づけがない。こんな時代において、われわれ末端行政は、困っている。懇話会の中で意見をもらって、1つ1つ施策を実現させたい。大島会長がおっしゃるように「大府に見に行けばいい」という長寿社会のモデルを創りたい。

【大山委員】

長寿社会は元気で楽しくありたい。終生安泰の自営業などはまだいいが、圧倒的に多いサラリーマンの退職者をどのように導くか。健康、経済、生きがいは、自らの力で努力すれば、リタイヤしたあとも、自分で切り開ける。

再就職とか、今までやれなかった趣味、商売等をやってみるとか。現実的に言えば、今、私が携わっているシルバー人材センターへ登録していただくとか。これは、社会貢献に報酬がプラスされますのでよろしいかと思えます。

また、4つ目には、社会福祉協議会でのボランティア。自分の長生きや健康、趣味を

他人へ向かって差し上げると、生きがいにもなると思います。また老人クラブ活動も。

生きがいつくりを皆さんに示してあげられれば、自分で選べられると思いますし、それが私の生き方になるだろうと思いますので、ありがたいことです。

しかし、自分で切り開くことができない人、健康でない人等は、福祉で支えていかなければならないと思います。

【大島会長】

ありがとうございました。自分の命と健康は自分で守るのが基本。そこからはみでた人をいかに救うか。

【梶岡委員】

大府市で行われている健康づくりの施策はどんなものがあるかを示してもらえると、大府市に足りないものや組み合わせると効果的なものが見えてくると思います。

私は、健康が専門なので、どうしても偏ってしまうが、次に高齢者になる年代の健康を危惧しています。

今の子どもたちは小学校3年生から健康教育を受けているが、40代は受けていない人がほとんどで、健康に関する基本的な正しい知識がなく、あちこち振り回されている世代といえます。みのもんたの番組が健康教育の先生になっているようなことがあります。高齢者対策は、次の世代を見据えていかないと心配。是非、若い世代への取り組みを考えていきたい。

【大島会長】

大府市の施策については、次回までに事務局で資料を揃えてください。

【事務局】

わかりました。

【市長】

今は、小学校3年から健康教育を受けているのですか。

【梶岡委員】

平成10年に学習指導要領が変わり、今は小学校3年から保健を実施。昔は、雨降り保健と言って、雨で体育ができないときの代わりに行うのが保健であった。系統立ったきちんとした健康教育を受けていない人がかなり残っている。今の子どもたちは、学歴の中で学んでいますが、この残った人たちをどう導くかは大切なこと。知っているだけでは、だめだとは思いますが、基本的な正しい知識がないと、間違った方向に行ってしまうので。

長寿医療センターでの最先端の研究成果は、どのように市民にフィードバックされているのでしょうか。

【大島会長】

今は、具体的に行政と結びついていないのが現状です。

【梶岡委員】

いい形で活かせていけたらいいですね。

【市長】

大府市には、長寿医療センター、あいち小児医療、認知症研究センター等、たくさんのすばらしい研究施設があります。これらの実践機関との連携をしていけたらいいと思っています。

【大島会長】

それらの機関が個別に動いていては、意味がない。社会全体の地域設計やまちづくりの中でのトータルな連携が必要であります。

医療を切り口にして言うと、病院はある意味、隔離社会である。隔離社会に入って、病気をよくしてもらって退院していく。社会の中に病院はあるが、実際は地域に結びついていないのが現状であります。

では、高齢者にふさわしい医療とは何か。制度としてどう保障していくべきか。地域全体で見えていくのが高齢者医療の相応しい姿であると思います。

病院は、人や機械を集中的に整備している所ですから、病院でしかできない医療を特化してやらないと社会資本的にみても非常に無駄であります。

今までは、最期は病院という社会的入院の使い方が一般的だったが、本来の医療の使われ方としてそれでいいのか。本来、人は住み慣れたまちで生涯を全うして、医療もそれに繋がるようなものであるべき。

戦後作り上げた医療の理念の大転換となる。生活の中に医療があって、病院は緊急避難場所。それが、緊急避難所的な位置づけをせずに、何でも病院だというふうになってしまっているから医療費も上がる。誰が悪いということはないのですが。

【市長】

病院と診療所は分けて考えておられますね。

【大島会長】

今までは分けていました。これからは、そうでなく診療所と病院は同じで、役割分担でしかない。診療所だけが地域ではない。「地域全体が病院」「道は廊下」である。中日

新聞に出ていて、いい表現だと思いました。

だから、少し熱が出たくらいでは、そこで対処し、命にかかわるときだけ病院へ。診療所も病院もあらゆる医療資源が人の生活をベースにして動く。そういう施設にならないといけない。そこへ行けば何かやってくれるよということではない。

大府市は、日本中で最も条件のそろった場所なのです。

【市長】

かつて、生涯学習が流行ったときに、「都市全体をキャンパスだ」というのと同じで、「地域全体が病院」という発想は、とてもいいですね。「病院」という言葉は、少し別のイメージがある気がしますので、別のことばを使ってもいいのかもしれませんが、地域全体で医療を支えるという中で、病院は一つの役割を果たすということですね。

今、高齢者のうつがとても多い。となり同士でも話せば心が安らぐこともある。それが病院機能を果たしていることにもなります。認知症も多いですが、他人と話すことで、避けられるのではないかと思います。

【堀田委員】

最近はお年寄り、老人という言葉を使わずに、「高齢者」と言いますね。私は、この「高齢者」という言葉に冷たい響きを感じます。お年寄りや老人は、失礼だからでしょうか。私は「お年寄り」という言葉の復権があつていいのではないかと思います。子どもは、おじいちゃん、おばあちゃんが大好きです。祖父母の話をするときの子どもの目は輝いています。その尊敬の視線を切らないような教育のあり方があって、そのまま大人になっていけばいいと思います。

都市部では、核家族化が進み、高齢者に対する隔たった見方があります。自分の親が高齢者になると、この前まで慈しむ存在だった親が、お荷物のように感じてしまう人が多い。個人的な感想ですが。

3年前の万博でモリゾー（キッコロのおじいちゃんという設定）が人気になったのは、子どもたちはおじいちゃんが好きだからでは。

年をとった人への尊敬の念が、切れてしまわないような取り組みが必要だと思います。また、言葉によって、何かが変わってしまう気がしています。

【大島委員】

「高齢者」は無難な表現だから使われていると思います。お年寄りや老人という言葉「侮辱だ」という人もいるので、結果的に日本文化を味気ないものとしているのは、事実です。

【堀田委員】

最近、祖父母を「じいじ、ばあば」と呼ぶのが一般的で、「おじいちゃん、おばあち

ゃん」と呼ぶ子はあまりいない。年齢を感じさせないようにしているのか。確かに、今の園児の祖父母は若く、現役感が強い。

【市長】

私どもも「高齢者」については、何か他にいいネーミングはないかと思っていたところでした。ほとんどの高齢者は、元気だから、「お年寄り」「老人」という表現は、使いにくい。「シニア、熟年者…」いろいろ考えてはありましたが、この場でいいネーミングが見つかればと思います。

【大島会長】

言葉は、行政のフィルターを通すと無味簡素なものになってしまう。堀田さんの指摘は大切なことだと思います。言葉をどう大事にするかで決定的に変わることありうると思います。

【市長】

障がい者が増えていて、「障がい者」という表現も気を使っています。私どもは今、「発達の気になる子」と言っています。

【堀田委員】

私は、「難しい子」と呼んでいます。「difficult children」と。

【市長】

高齢者の言い方について提言をいただければ、ここから発信していきたいと思います。

【大島会長】

他に何かありませんか。

【市長】

今回は、現行の制度の資料を提示できるようにします。

【大島会長】

ここで皆さんと共通の理解を持ちたいと思います。これまで、65歳以上の高齢者の世代を念頭に置いたまちづくりは行われてきませんでした。今ある道路、建物、通信等、すべて完成された成人を対象に設計されてきたものです。

人口の3分の1が高齢者という時代を迎えても、高齢者の実態がつかめていない。本当に高齢者は弱者なのか。「高齢者」とはいったい何なのか。

例えば、70歳を中心に考えたときの街の中のトイレの位置や数は？ いつでも心配なく

トイレに入れる設計を考えてもいいのではないか。今は誰もそんなことを考えていない。

これからは、まちづくりにおいて、高齢者をキーワードに入れ、何が必要かを考えるべき。

認知症の人についても同じ。社会においては、互いの権利と自由を認め合って、個人と個人の関係性が保たれるのだが、片一方が認知症で関係性を保つ能力がなくなったときにどうするのか。例えば、レストランのバイキングで、横から入ってくる高齢者がいる。「何だ？」という顔をすると、向こうの顔つきが何か変だということになる。それで、そこで揉め事が起こるわけです。

高齢者の7%が認知症。70代～80代は、20%と言われている。

その人がその人らしく生きられる社会づくりをしようじゃないかというのが、国中の合言葉である。したがって、今までの社会ルールでは対応できなくなっている。高齢社会とは、例えばそういう社会なのである。それを踏まえ、これからどんなまちづくりをしていったらいいか。それは、若い世代にも影響するし、子どもの教育への影響してくる。そういう高齢社会が目の前に来ているのです。

こういうことをイメージしながら、「どういうまちづくりをしていけばいいか」を皆さんに考えてもらいたい。

【市長】

「そういう社会が目の前なんだ」という映画を作って、皆に見てもらいたいですね。ゴア副大統領の「不都合な真実」という映画がありましたよね。そこら中で喧嘩が起こるような。そういう社会がすぐ目の前にあることをわかってもらいたいですね。認知症や高齢社会が原因でそういう社会が生まれてくるかもしれませんね。

【大島会長】

違いがないですね。今まで認知症は精神病院に入れて排除することが多かった。しかし、排除すればするほど、悪化する。排除するのではなく、人間らしく生かしたい。それを社会で受け入れていけなければならない。社会変革が必要です。

【市長】

来庁者と職員のトラブルも起きています。

【大島会長】

認知症を病気として扱えばいいのだが、家庭での認知症介護は難しい。理不尽なことを言われて、病気とわかっていても虐待につながるケースもある。毎日同じことの繰り返しで、言われているうちに、介護者も頭にくることがある。

100歳を過ぎると97%が認知症と言われている。

高齢者とはどういう人か。長生きしてよかったと思えるには、マイナス面を直視する

ところから始めなければいけない。日本人は直視することが苦手である。

欧米では食事がとれなくなったら、ある意味の区切り。また、胃ろうのことも大変な問題になっています。胃ろうは、将来、経口摂取ができることを前提条件にすべきである。

また、安楽死、尊厳死の問題。これは聖域に近い話ですが。いろいろ極端な話をしていますが、マイナス面を直視しなければ、いけないということです。

【市長】

医療は大変難しい問題ですので、懇話会では深入りできませんが。医療との連携という面では、進めていきたいと思えます。

【大島会長】

時間もありませんが、他に何か。

【梶岡委員】

認知症については、大府市は予防施策が活発だと思えます。予防施策を大府方式という形で打ち出していったはどうでしょうか。長寿医療センターのデータ（運動と健康の相関関係のデータ等）も活用しながら。それは、認知症を遅らせることになると思う。現在、市で取り組んでいることを次回示してもらいたい。

【大山委員】

地域活動に参加することで、認知症が遅らせられるなら、やりがいがあると思えます。シルバー人材センター事業には平成19年度で560名が登録しています。今はまだ60歳以上人口の3%ですが、その分の仕事が獲得できるかどうかは別として、将来的には、25%くらいまで伸ばしたいと思えます。そうすれば、かなりの元気な人を救っていけると思えます。

閉 会

【大島会長】

時間になりましたので、第1回はこれで終わりたいと思います。

【市 長】

次回は、具体的なことをお出しして、進めていただきたいと思います。

【広 瀬】

ありがとうございました。それでは、最後に副市長から、ご挨拶申し上げます。

【副市長】

本日は、様々な角度から、貴重なご意見いただきまして、ありがとうございました。次回は、大府市の取り組みと大沢委員からご質問いただきましたウェルネスバレー構想の紹介をさせていただき、議論の参考にしていただきたいと思います。

【広 瀬】

本日はありがとうございました。次回は、8月20日（水）15時30分から、2階の204会議室で行いますので、よろしくお願いいたします。